

吉村明の みつひかり 栽培日誌 8



吉村明
三井化学アグロ株
営業本部マーケティング部
ハイブリッドライス種子グループ
グループリーダー

1962年生まれ。1988年 北海道大学大学院農学研究科修了。同年 三井東圧化学(株) (現三井化学) 入社、農業資材開発に従事(北海道工業所勤務)。1996年 本社異動後、ハイブリッドライス事業開発を担当。2000年に事業ごと三井東圧農業(株) (現三井化学アグロ) に異動し、現在に至る。17年間「みつひかり」をライフワークに、全国を飛び回る。

今年も異常気象？

7月中旬で一番遅い田植えが終わりました。新たな取り組みが始まった南東北と山梨は、秋の早い地域です。登熟期間の長いみつひかりです。田植え時期や施肥量を考慮することで登熟できるかを見極めたいと思っています。

梅雨明け以来猛暑が続き、水不足が懸念される産地がある一方、記録的な大雨となっている地域もあり、異常気象が当たり前になってきました。



図1：水不足の影響を受けて、葉が巻いてしまった圃場



図2：栽培方法の改善により順調に生育するみつひかりの様子

た。みつひかりは環境適応性が高い稲ですが、渇水で葉が巻いてしまった圃場もありました(図1)。「必要な時期以外、水は不要」といっても最低限の水は必要です。

以前から肥料卸が取り組みを進めている産地を巡回したところ、「生育後半まで水がある圃場」で「遅くまで効く肥料を使用」という10年以上前の栽培指針のまま、目標は「必ず倒伏するので倒さず安定的に10俵獲る」とのこと。「元肥重視」「強めの中干し」「登熟を進めるため余分な水・養分を切る」といった現在のみつひかり栽培の基本を説明し、今年栽培方法を改善していただきました。

「これなら倒れなさそう」との生産者の声も(図2)。果たして結果はどのようになるのでしょうか？



「みつひかり物語」⑧

「吉野家」が使用しているコメとして認知されてきたみつひかりは、立ち上げから10年経ってようやく形が見えてきたところです。

栽培が大きく広がってきた要因は、各産地を中心とする生産者・集荷業者が近隣の生産者にみつひかりの特徴を、生産現場目線で紹介・説明し、仲間に引き入れてくださったことでしょう。こうした口コミの広がりと栽培技術の向上が相まって、現在のみつひかりがあります。

また、消費先が見えるように実需者(外食企業や米卸)が産地を巡回し、会合に向かっています。その一例に、中日本で毎年開催している「みつひかり生産者大会」があります。第4回目となる今年には福井県あわら市に、総勢約40名が集まりました。会場を提供した「夢屋・華筑紫」では、みつひかり2005を3年前から使用しています。女将・清水さんから「お客様から大変好評です」との話がありました。一方、実需者からは「国内の主食米は過去最大の在庫



イネウンカ類防除のポイント

●イネウンカ類の特徴

育苗箱処理剤の普及で一時期なりを潜めていたイネウンカ類。再び、イネ最大の害虫として注目されています。日本で被害をもたらすのは、トビロウンカ、セジロウンカ、ヒメトビウンカの3種類。セジロウンカとトビロウンカは国内で越冬できず南国からやってきます。ベトナム北部で越冬し、季節風に乗って中国南部へ移動して増殖、6月下旬の稲刈りで飛び立ちます。この時期に日本付近にかかる梅雨前線に沿って発達する下層ジェット気流に乗って、日本に飛来します。セジロウンカは、田植え直後に飛来し出穂期前まで沢山見かけますが、若い稲を好み、その後飛び去ります。枯らすほどの被害はほとんど出ませんが、近年、イネ南方黒すじ萎縮病を媒介することが西日本で初めて発見され、防除の大切さが再認識されています。トビロウンカの飛来は、セジロウンカの1/100程度です。猛暑に弱くお盆までは少数見つかるかどうか。それが秋口に涼しくなると、

稲の根元近くで大増殖することがあります。移動性の少ない短翅型が大集団で狭い範囲の汁を吸い、坪枯れ(円形状に枯れて倒れる状況)を起こします。昨年は西日本から秋田まで広い範囲で発生しました。

ヒメトビウンカは、国内の畦などで越冬し小麦で増殖し、稲の田植え直後から加害します。問題は縞葉枯病ウイルスをうつすことです。若い稲ほど感染しやすく、田植え直後の防除が大切です。近年、縞葉枯病は九州、近畿の一部や関東で問題化しています。

●薬剤防除のコツ

トレボンスター®は三井化学アグロ株が開発した有効成分トフェンブロックスとジノテフランを含む殺虫剤です。トレボンスター®粉剤DLは、一部薬剤への感受性低下が報告されている系統のトビロウンカ、セジロウンカ、ヒメトビウンカに対して効果が期待できます。さらに水稲では収穫7日前まで使用でき、仕上げ防除剤として使い勝手の良い設計になっています。

十分に登熟させ、早刈りには注意!!

があり、販売環境は大変厳しいが、実需者と結び付きがあり、確実に消費されるみつひかりはまだまだ必要」との話がありました。参加者のさらなる生産意欲向上に役立つたのではないのでしょうか。

【訂正】先月号の表1…産品種銘柄の指定状況において、2010年産新規設定に「三重・愛媛・大分」の3県が抜けていました。お詫びして訂正いたします。



栽培のポイント⑧

いよいよ出穂を迎えるみつひかり。ここまでは草姿は一般品種と異なりますが、草丈も周囲の稲とそれほど変わりません。ところが、出穂期から急激に草丈が高くなり、圃場の様子が一変します。穂の下の第1・2節が物凄く伸びるからです。稈長1mに30cmの穂が付きませんが、これを支えるだけの根圏・下位節を準備できていけば倒伏の心配はありません。出穂の早い混じりの穂は、F1品種の特徴とご理解ください。

よく「みつひかりの積算温度は何度？」との質問をいただきますが、条件により大きく異なるため、12

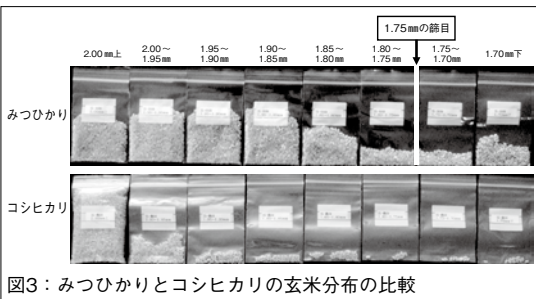


図3：みつひかりとコシヒカリの玄米分布の比較

①十分に登熟させ、早刈りには注意!!
出穂から刈りまでの登熟日数は、長穂のため長くなります。刈取りが遅くなっても、品質低下はほとんど見られません。早刈りで収量を2-3倍落とす場合があります。

②刈取りは負荷をかけ過ぎずゆっくり!!
長穂のため、コンバインの刈取り位置はやや高刈りです。刈取り速度を控え、無理せず能力に合った条件刈り。

③篩目で収量が大きく変動します!!
みつひかりは一般品種より粒形がやや長いという特徴があります。収量と品質を両立するため、適切な篩目を使用することが重要。

篩目	1.75mm	1.80mm	1.85mm	1.90mm
10aあたりの収量	13.2俵	12.5俵	10.5俵	7.7俵

※収取(1.75mm)と250gサンプルの篩目別玄米分布からの計算値

格付	収率14日前	適期収穫時
A	→	S
整粒	70.9	85.2
未熟	25.8	10.6

※地域、気象条件、圃場条件、施肥体系等の栽培条件により登熟の進み具合が異なります。必ず圃場で、状態を確認して刈取り時期を判断してください。

図4：みつひかりの栽培ポイント—刈り取り時期の判断—

協力：
三井化学アグリ株式会社 営業本部 マーケティング部
ハイブリッドライス種子グループ
〒105-7117 東京都港区東新橋1-5-2
汐留シティセンター
TEL：03-3573-9869 FAX：03-3573-9891

さて、最後の栽培のポイントは「十分に登熟させる」ことです。水管理は「天水で十分」と特に気にしていません。ただし、水分がないと米粒が大きくならないのも事実です。雨が2週間以上降らず、圃場が相当乾燥しているようならサラッと水を流せばベストです。水がなくても品質低下はほとんど見られず、「刈り

遅れ」は気にする必要がありません。早刈りすると青米が入り、糊摺りがしづらくなります。みつひかりは父親に少しインデイカ米の血が入っており、玄米がやや細長い形をしています。いいお米を篩下に落とさないうように細かい篩目(1.75mmなど)を使用してください(図3)。

青米が10%以上残る状態から完熟まで約2週間で、収量が2俵増えて品質も向上した、という事例があります。慌てず、ゆっくりと刈り取りできるのがみつひかりの良いところです(図4)。

※次の最終回は11月号になります。

斑点米カメムシ類防除のポイント

稲の穂を吸汁して、斑点米発生の原因となっているカメムシの重要種は10～15種類。これらカメムシ類の重要度は地域によって異なります。1970年代以降、全国的な規模で斑点米が問題となりましたが、これは休耕田が増加し始めた時期と重なります。特に、斑点米カメムシ類にとってイネ科雑草の種子は重要な栄養源です。

斑点米カメムシ類防除のポイントには耕種防除と薬剤防除があります。薬剤防除を効果的にするためにも、耕種防除をしっかりと行うことが非常に重要です。

●耕種防除のコツ

耕種防除にはまず、水田内の除草があります。これは水田内の雑草の種(ヒエ、ホタルイ等)が斑点米カメムシ類の誘引源、増殖源となるからです。また、水田周辺の除草も重要です。水田周辺の雑草の種子が好適な餌となるとともに、水田内に侵入するための中継地点となるからです。水稲出穂前の雑草管理を徹底し、出穂後も継続するこ

とで斑点米カメムシ類の密度を低く抑えることが期待できます。

●薬剤防除のコツ

一方、薬剤防除の適期は斑点米が多く発生する時期になりますが、まずは穂揃期が基本です。ただ、その後も発生が多い場合は7～10日間隔での追加防除を行ないます。「スタークル®」は三井化学アグリ(株)が開発した有効成分ジノテフランを含む殺虫剤です。水稲ではカメムシ類、ウンカ類、ツマグロヨコバイ、ウナゴ類、イネドロオイムシ、イネミスゾウムシ、フタオビコヤガなど広範な害虫に効果を示します。特にカメムシ類に対しては基礎活性が高く、種間による活性差が小さいため、地域ごとのカメムシ発生種を問わず、防除場面で活用することができます。また、本剤の特色として顕著な吸汁阻害効果が挙げられます。本剤がカメムシに対して吸汁阻害効果を示す薬量は殺虫活性を示すそれに比べて低量です。この2つの作用により斑点米を効果的に抑制し、米の品質向上に寄与します。